

雅歌

イ王上四・三二 四四・一二・三二 約一四・二・三・六 四・一・七・五・二、 二代下・一・二六・一七
口歌四・一〇 二解三・二二・一四 へ歌五・九・六・一 六・四約一五・二四、 リ結一六・一一・一三
ハ何一・一・四 約六・ 水詩四五・二四、一五 ト歌三・二、一〇、一三 一五 又歌四・一、五・二二

第一章

一 これはソロモンの雅歌なり
二 ねがはしきは彼その口の接吻をもて我にくちつけせんこと
三 なり 汝の愛は酒よりもまさりぬ
四 なたる香膏のごとし 是をもて女子等なんぢを愛す
五 たづさへてその後宮にいれたまへり 我らは汝によりて歡び樂しみ酒よりも勝りてなんぢの愛をほめたふ 彼らは直きころをもて汝を愛す
六 エルサレムの女子等よ われは黒けれどもなほ美はしケダルの天幕のごとく またソロモンの帷帳に似たり
七 われ色くろきが故に日のわれを焼たるが故に我を視るなかれ わが母の子等 われを怒りて我に葡萄園をまもらしめたり 我はおのが葡萄園をまもらざりき
八 わが心の愛する者よなんぢは何處にてなんぢの群を牧ひ 午時いづこにて之を息まするや 請ふわれに告よ なんぞ面を覆へる者の如くしてなんぢが伴侶の群のかたはらにをるべけんや
九 婦人の最も美はしき者よ なんぢ若しらずば群の足跡にしたがひて出ゆき 牧羊者の天幕のかたはらにて汝の羔山羊を牧へ
一〇 わが佳耦よ 我なんぢをパロの車の馬に譬ふ なんぢの臉には鏈索を垂れ なんぢの頭には珠玉を陳ねて至も美はし
一一 われら白銀の星をつけたる黄金の鏈索をなんぢのために造らん
一二 王其席につきたまふ時 わがナルダ其香味をいだせり
一三 わが愛する者は我にとりてはわが胸のあひだにおきたる没薬の袋のごとし
一四 わが愛する者はわれにとりてはエンゲデの園にあるコペルの英華のごとし
一五 あゝ美はしきかな わが佳耦よ あゝうるはしきかな なんぢの目は鳩のごとし
一六 わが愛する者よ あゝなんぢは美はしくまた樂しきかな われらの牀は青緑なり
一七 われらの家の棟樑

は香柏かうはく その垂木たるきは松まつの木きなり

第二章

われはシヤロンの野の花はな谷たにの百合ゆかり花りなり
女子等にうなごらの中なかにわが佳耦ととものあるは荆棘いばらの中なかに百合ゆかり花り
のあるがごとし
わが愛する者ものの男子等そのこらの中なかにあるは林はやしの樹きの中なかに林檎りんごのあるがごとし

我われふかく喜びよろこびてその蔭かげにすわれり その實みはわが口くちに甘あまかりき
彼かれわれをたづさへて酒宴さかもりの室いへにいれたまへり

その我上わがうへにひるがへしたる旗はたは愛あいなりき
請こふ なんぢら乾葡萄ほしぶどうをもてわが力ちからをおぎなへ 林檎りんごをもて我われに力ちからを

つけよ 我われは愛あいによりて疾やみわづらふ
かれが左ひだりの手てはわが頭かしらの下したにあり その右みぎの手てをもて我われを抱いだく

ルサレムの女子等にうなごらよ我われなんぢらに獐しかと野の鹿しかとをさし誓ちかひて請こふ 愛あいのおのづから起おこるときまでは殊更ことさらに喚起よびおこし

且かつ醒さますなかれ
わが愛する者ものの聲こゑきこゆ 視みよ 山やまをとび 岡おかを躍をどりこえて來きたる
わが愛する者ものは獐しかの

ごとくまた小鹿こじかのごとし 視みよ彼かれわれらの壁かべのうしろに立たち 窓まどより 覗のぞき 格子かうしより 窺うかがふ
わが愛する者もの

われに語りて言いふ わが佳耦とともよ わが美うるはしき者ものよ 起たちていできたれ
視みよ 冬ふゆすでに過すぎ 雨あめもやみてはやさり

ぬ もろもろの花はなは地ちにあらはれ 鳥とりのさへづる時ときすでに至いたり 班鳩やまほとの聲こゑわれらの地ちにきこゆ
無花果いちじく樹のきは

その青あそき果みを赤あからめ 葡萄ぶどうの樹きは花はなさきてその馨かぐはしき香にほひ氣きをはなつ
わが佳耦とともよ わが美うるはしき者ものよ 起たちて出いできたれ

磐間いはまにをり 斷崖たきの匿かくれ處ところにをるわが鴿はとよ 我われになんぢの面かほを見みさせよ なんぢの聲こゑをきかしめよ なんぢの聲こゑ

は愛あいらしくなんぢの面かほはうるはし
われらのために狐きつねをとらへよ 彼の葡萄園ぶどうのをそこなふ 小狐こきつねをとらへよ

我等われらの葡萄園ぶどうのは花はな盛はななればなり
わが愛する者ものは我われにつき我われはかれにつく 彼は百合花ゆかりの中なかにてその群むれを牧かふ

わが愛する者ものよ 日ひの涼すずしくなるまで 影かげの消きるまで身みをかへして出いでゆき 荒あき山やま々々の上うへにありて獐しかのごとく

イ歌三三・一二 二歌二・一七
ロ歌八・三 水歌二・一三
ハ歌三・五、八・四 ヘ歌二・一〇
ト歌八・一三 結一
チ詩八〇・一三 又歌四・六
三・四路一三・三二 九歌二・九、八・一四
リ歌六・三、七・一〇

ヲ賽二六・九
ワ歌五・七
カ歌二・七、八・四
ヨ歌八・五
夕歌一・一五、五、一二
ツ歌六・七
レ歌六・五
ネ歌七・四

小鹿のごとくせよ

第三章

一 夜われ床にありて我心の愛する者をたづねしが尋ねたれども得ず 我おもへらく今おきて邑を
 二 まはりありきわが心の愛するものを街衢あるひは大路にてたづねんと乃ちこれを尋ねたれども
 三 得ざりき 邑をまはりありく夜巡者らわれに遇ければ汝らわが心の愛する者を見しやと問ひ これに別れて
 四 過ゆき間もなくわが心の愛する者に遇たれば之をひきとめて放さず遂にわが母の家にともなひゆき我を産し
 五 者の室にいりぬ エルサレムの女子等よ 我なんぢらに獐と野の鹿とをさし誓ひて請ふ愛のおのづから
 六 起る時まで殊更に喚起し且つ醒すなかれ この没薬乳香など商人のもろもろの薫物をもて身をかをらせ
 七 煙の柱のごとくして荒野より來る者は誰ぞや 視よこはソロモンの乗輿にして 勇士六十人その周圍に
 八 ありイスラエルの勇士なり みな刀劍を執り 戰鬥を善す 各人腰に刀劍を帶て夜の警誠に備ふ ソロモン王
 九 レバノンの木をもて己のために輿をつくれり その柱は白銀 その欄杆は黄金 その座は紫色にて作りその
 一〇 内部にはイスラエルの女子等が愛をもて繡たる物を張つく シオンの女子等よ 出きたりてソロモン王を見よ
 二 かれは婚姻の日心の喜べる日にその母の己にかうぶらし 冠冕を戴けり

第四章

一 あゝなんぢ美はしきかな わが佳耦よ あゝなんぢうるはしきかな なんぢの目は面帕のうしろに
 二 ありて鴿のごとしなんぢの髪はギレアデ山の腰に臥たる山羊の群に似たり なんぢの齒は毛を
 三 剪たる牝羊の浴場より出たるがごとしおのおの雙子をうみてひとつも子なきものはなし なんぢの唇は紅色
 四 の線維のごとくその口は美はしなんぢの頬は面帕のうしろにありて石榴の半片に似たり なんぢの頸項は

武器庫にとて建たるダビデの成樓のごとしその上には一千の盾を懸つらぬみな勇士の大楯なり Ⅲ なんぢの兩

乳房は牝犖の雙子なる二箇の小鹿が百合花の中に草はみをるに似たり Ⅳ 日の涼しくなるまで影の消るまで

われ没薬の山また乳香の岡に行べし Ⅴ わが佳耦よなんぢはことごとくうるはしくしてすこしのきずもなし

新婦よレバノンより我にともなへレバノンより我とともに來れアマナの巔セニルまたヘルモンの巔より

望み獅子の穴また豹の山より望め Ⅵ わが妹わが新婦よなんぢはわが心を奪へりなんぢは只一目をもてまた

頸玉の一をもてわが心をうばへり Ⅶ わが妹わが新婦よなんぢの愛は樂しきかななんぢの愛は酒よりも遙にす

ぐれなんぢの香 Ⅷ 膏の馨は一切の香物よりもすぐれたり Ⅷ 新婦よなんぢの唇は蜜を滴らすなんぢの舌の底に

は蜜と乳とありなんぢの衣裳の香氣はレバノンの香氣のごとし Ⅸ わが妹わがはなよめよなんぢは閉たる園

閉たる水源封じたる泉水のごとし Ⅹ なんぢの園の中に生いづる者は石榴及びもろもろの佳果またコペル及び

ナルダの草 Ⅺ ナルダ 番紅花 菖蒲 桂枝さまざまの乳香の木および没薬 蘆薈一切の貴とき香物なり Ⅻ なんぢ

は園の泉水 Ⅻ 活る水の井レバノンよりいづる流水なり Ⅼ 北風よ起れ 南風よ來れ 我園を吹てその香氣を

揚よ Ⅽ わがはくはわが愛する者のおのが園にいりきたりてその佳き果を食はんことを

第五章

Ⅰ わが妹わがはなよめよ Ⅰ 我はわが園にいり わが没薬と薰物とを採り わが蜜房と蜜とを食ひ わが

酒とわが乳とを飲り わが伴侶等よ Ⅱ 請ふ食へ わが愛する人々よ Ⅲ 請ふ飲あけよ Ⅳ われは睡り

たれどもわが心は醒めたり Ⅴ 時にわが愛する者の聲あり Ⅵ 即はち門をたゝきていふ わが妹 わが佳耦 わが

完きものよ われのために開け わが首には露満ち わが髪は夜の點滴みてりと Ⅶ われすでにわが衣服を

イ尼三・一九 二第五・二七 ト第ニ四・一三、一四 一四・六、七 三・二九、一五、一四
ロ第五・一九 歌七・三 水申三・九 歌五・一 約四・一〇、七、三八 七歌四・一一 三・二〇
ハ歌二・二七 へ歌一・二 チ制二七・二七 何又歌五・一 ワ路一五・七、一〇 約 力歌三・二〇
ヨ歌三・一 夕歌三・三
レ歌一・八 ソ歌一・一五、四、一 ツ歌一・八

四 脱りいかでまた着るべき 已にわが足をあらへり いかでまた汚すべき わが愛する者戸の穴より手をさしい
 五 れしかばわが心かれのためにうごきたり やがて起いでてわが愛する者の爲に開かんとせしとき 没薬わが手
 六 より没薬の汁わが指よりながれて關木の把柄のうへにしたれり 我わが愛する者の爲に開きしにわが愛する
 者 者は已に退き去りぬ さきにその物いひし時はわが心さわぎたり 我かれをたづねたれども遇す 呼たれども答應
 七 なかりき 邑をまはりありく夜巡者等われを見てうちて傷つけ 石垣をまもる者らはわが上衣をはぎとれり
 八 エルサレムの女子等よ 我なんぢらにかたく請ふもしわが愛する者にあはれ 汝ら何とこれにつぐべきや 我愛
 九 によりて疾わづらふと告よ なんぢの愛する者は別の人の愛する者に何の勝れるところありや 婦女の中の
 一〇 いと美はしき者よ なんぢが愛する者は別の人の愛する者に何の勝れるところありて 斯われらに固く請ふや
 一〇 わが愛する者は白くかつ紅にして 萬人の上に越ゆ その頭は純金のごとく その髪はふさやかにして 黒き
 一一 こと鳥のごとし その目は谷川の水のほとりにをる 鳩のごとく 乳にて洗はれて 美はしく嵌れり その頬は
 一二 馨しき花の床のごとく 香草の壇のごとし その唇は百合花のごとくにして 没薬の汁をしたよらす その手は
 一三 きばみたる碧玉を嵌し 黄金の釧のごとく 其躰は青玉をもて おほひたる象牙の雕刻物のごとし その脛は蠟石
 一四 の柱を黄金の臺にたてたるがごとく その相貌はレバノンのごとく その優れたるさまは 香柏のごとし その口
 一五 ははなはだ甘く 誠に彼には一つだにうつくしからぬ所なし エルサレムの女子等よ これぞわが愛する者 これぞ
 一六 わが伴侶なる

第六章

一 婦人のいと美はしきものよ 汝の愛する者は何處へゆきしや なんぢの愛する者はいづこへおもむ
 きしや われら汝とともにたづねん
 二 わが愛するものは己の園にくだり 香しき花の床にゆき

園そのの中なかにて群むれを牧かひ また百合花ゆかりを採とる 我われはわが愛あいする者ものにつき わが愛あいする者ものはわれにつく 彼は百合花ゆかりの

中なかにてその群むれを牧かふ わが佳耦よともよ なんぢは美うらはしきことテルザのごとく 華はなやかなることエルサレムのご

とく畏おそるべきこと旗はたをあげたる軍旅つはもののごとし なんぢの目めは我われをおそれしむ 請こふ我われよりはなれしめよなん

ぢの髪かみはギレアデ山やまの腰こしに臥ふしたる山羊やぎの群むれに似にたり なんぢの齒はは毛けを剪きりたる牝羊めひつじの浴場あらいばより出いでたるがごとし

おのおの雙子ふたごをうみてひとつも子こなきものはなし なんぢの頬ほは面帕かほほひの後うしろにありて石榴ざくろの半片かたわれに似にたり 后あきき

六十人にん 妃嬪せひなめ八十人にん 數かずしられぬ處女せとめあり わが鴿はとわが完またき者ものはたゞ一人ひとりのみ 彼かれはその母はの獨子ひとりごにして産うみたる

者ものの喜よろこぶところの者ものなり 女子等せうなごらは彼かれを見て幸さい福はひなる者ものとなへ 后きさきたちをせひなめたち等らは彼かれを見て讚ほむ この晨光しのめの

ごとくに見みえわたり 月つきのごとくに美うらはしく 日ひのごとくに輝かがやき 畏おそるべきこと旗はたをあげたる軍旅つはもののごとき者ものは

誰たれぞや われ胡桃くるみの園そのにくだりゆき 谷たにの青あをき草木くさきを見み 葡萄ぶどうや芽めし、石榴ざくろの花はなや咲さきしと見み回ましをりしに

意おもはず知しらず我わが心こころわれをしてわが貴たふとき民たみの車くるまの中なかにあらしむ 歸かへれ歸かへれシユラミの婦をんなよ 歸かへれ歸かへれ

われら汝なんぢを觀みんことをねがふ なんぢら何なんとてマハナイムの跳をどり舞を觀みることくにシユラミの婦をんなを觀みんと

ねがふや

第七章

君きみの女むすめよ なんぢの足あしは鞋くつの中なかにありて如何いかに美うらはしきかな 汝なんぢの腿ももはまろらかにして玉たまのごとく 巧匠たくみの手てにて作つくりたるがごとし なんぢの臍へそは美酒よきさけの缺かることあらざる圓まるき杯盤さかづきのごとくなん

ぢの腹はらは積つみかさねたる麥むぎのまはりを百合花ゆかりもてかこめるが如ごとし なんぢの兩乳房もちぶきは牝鹿めじかの雙子ふたごなる二ふたつの小鹿こじかの

ごとし なんぢの頸うなじは象牙ぞうじの成樓やぐらの如ごとく 汝なんぢの目めはへシボンにてバテラビムの門もんのほとりにある池いけのごとく

イ歌三・一六・七・一〇 二歌四・二
ロ歌六・一〇 六歌四・三
ハ歌四・一 へ歌六・四

ト歌七・一二 チ詩四五・二三
リ歌四・五

又歌四・四

ル歌二・一六、六・三
カ創三〇・一四
ヲ詩四五・一一
ヨ太一三・五二
夕歌六・一一
夕歌九・一一
レ歌二・六
ソ歌二・七、三・五
ツ歌三・六
ネ賽四九・一六
耶
二二・二四 基二
二三

五 なんぢの鼻はダマスコに對へるレバノンの成樓のごとし なんぢの頭はカルメルのごとくなんぢの頭の髪は
六 紫色のごとし 王その垂たる髪につながれたり あゝ愛よもろもろの快樂の中にありてなんぢは如何に美はし
七 如何に悦ばしき者なるかな なんぢの身の長は棕櫚の樹に等しくなんぢの乳房は葡萄のふさのごとし
八 われ謂ふこの棕櫚の樹にのぼり その枝に執つかんとなんぢの乳房は葡萄のふさのごとくなんぢの鼻の氣息
九 は林檎のごとく匂はん なんぢの口は美酒のごとし わが愛する者のために滑かに流れくんだり 睡れる
一〇 者の口をして動かさむ われはわが愛する者につき 彼はわれを戀したふ わが愛する者よ われら田舎
一一 にくだり村里に宿らん われら夙におきて 葡萄や芽し、苔やいでし 石榴の花やさきし いざ葡萄園にゆきて
一二 見んかしこにて我わが愛をなんぢにあたへん 戀茄かぐはしき香氣を發ち もろもろの佳き果物古き新らしき
一三 共にわが戸の上にある わが愛する者よ我これをなんぢのためにたくはへたり

第八章

一 ねがはくは汝わが母の乳をのみしわが兄弟のごとくならんことを われ戶外にてなんぢに遇ふ
二 とき接吻せん 然するとも誰ありてわれをいやしむるものあらじ われ汝をひきてわが母の家に
三 いたり 汝より教誨をうけん 我かぐはしき酒石榴のあまき汁をなんぢに飲しめん 三 かれが左の手はわが頭の
四 下にあり その右の手をもて我を抱く エルサレムの女子等よ 我なんぢ等に誓ひて請ふ 愛のおのづから
五 起る時まで殊更に喚起し且つ醒すなかれ おのれの愛する者に倚かゝりて荒野より上りきたる者は誰ぞや
六 林檎の樹の下にてわれなんぢを喚さませり なんぢの母かしこにて汝のために劬勞をなしなんぢを産し者
七 かしこにて劬勞をなしぬ われを汝の心におきて印のごとくし なんぢの腕におきて印のごとくせよ 其は愛は

七 強くして死のごとく嫉妬は堅くして陰府にひとしその焔は火のほのほのごとしいとものはげしき焔なり 愛
 は大水も消ことあたはず洪水も溺らすことあたはず人その家の一切の物をことごとく興へて愛に換んとすると
 八 も向いやしめらるべし われら小さき妹子あり未だ乳房あらずわれらの妹子の間聘をうくる日には之に
 九 何をなしてあたへんや かれもし石垣ならんには我ら白銀の城をその上にたてん彼もし戸ならんには香柏
 一〇 の板をもてこれを圍まん われは石垣わが乳房は成樓のごとし是をもてわれは情をかうむれる者のごと
 二 彼の目の前にありき バアルハモンにソロモン葡萄園をもてりこれをその守る者等にあづけおき彼等を
 三 しておのおの銀一千をその果のために納めしむ われ自らの有なる葡萄園われの手にありソロモンなんぢは
 三 一千を獲よその果をまもる者も二百を獲べし なんぢ園の中に住む者よ 伴侶等なんぢの聲に耳をかた
 四 むく請ふ我にこれを聴しめよ わが愛する者よ 請ふ急ぎはしれ 香はしき山々の上において獐のごとく
 小鹿のごとくあれ

雅 歌 をはり

イ 歌六・三五
ロ 結三三・三三
ハ 太二一・三三

ニ 歌二・一四
ホ 歌三三・一七、二〇
ハ 歌二・一七